

永井荷風のGHQへの妥協—占領期検閲資料からの検証

諜報研究会第26回

2019年3月23日

山本武利

荷風検閲の諸段階

- A 原文（断腸亭日乗など）→そのままゲラで提出
書き直してゲラで提出（自主検閲）
- B 雑誌事前検閲 →パス
部分削除→修正なしのつなぎ
公表禁止
- C 書籍事前検閲 →パス
部分削除→修正なしのつなぎ
公表禁止

検閲当局への抵抗か—削除指定部分の書替えなし

永井荷風は戦中に書きためていた原稿を一挙に終戦とともに吐き出し、それら作品が広く読者に歓迎された老齢（終戦時66歳）の人気作家であった。一度雑誌に出され、時を経ずに単行本に収録される作品は珍しくなかった。

検閲当局は削除指定箇所をそのまま空白として残すことを許さなかった。他の作家や学者つまり書き手のほとんどが指定箇所と同じ行数をつじつま合わせの文章で埋めた。太宰治もその例外ではなかった（1）。彼らの文章力では別の文章で埋め、削除の痕跡を消すことはいたって簡単であったはずである。

荷風はもちろん空白を作らなかったが、ゲラの前後を機械的に連結させるいくつかの行為を行っている。読者に違和感やとまどいを与えることに頓着しなかったようである。出版社は当然他の書き手と同じ読者サービスを期待し、荷風に穴埋め作業を希望したろうが、人気作家の姿勢に逆らえなかった。荷風や出版社は多少の論理矛盾や違和感が出ても読者は許してくれるとの判断があったかもしれない。

以下の事例はメリーランド大学のプランゲ文庫で見つかったものである。

荷風は雑誌『新生』1946年8月号から「昭和十六年の日記」を連載し始めるが、その第2回目の9月号で4月4日の日記分を載せようとして事前検閲に出した。すると赤字で削除箇所が指示された。

事例①

四月初四 晴。近隣の桜花一時に満開となる。鶯頻に鳴く。嘯下土州橋に至りて健康

診断を請ふ。帰途銀座に飯す。新橋々上のポスタに「もう一押我慢しろ南進だ南進だ」とあり。車夫の喧嘩の如し。国家の品位何処に在りや。日本語の低下今は矯正の道なし。

①では検閲者は南進うんぬんのスローガンの掲載そのものを戦時プロパガンダと見たのであろう。この箇所は書替えられず、占領期では読者の目から遮断された。

雑誌発表の段階でパスした箇所が、単行本で新たな削除を受けるケースが生じた。「亜米利加の思出」は『新生』1945年11月号に発表された際に検閲の対象とならなかったが、1947年5月刊の『勲章』（扶桑書房）に収録された際に冒頭の部分(②)と文中の2行(③)が削除された。

事例②

皆様御存じの通り私は若い頃亜米利加に居た事はありますが何しろそれは幾十年の昔の事ですから、その時分の事を読んで見たからとて、今の世には何の用にもなりません。米国がいかほど自由、民主の国だからと云つて其国に行つて見れば義憤に堪えない事は随分ありました。社会の動勢は輿論に依つて決定される事になつて居りますが、其輿論には婦人の意見も加はつて居るのですから大抵平凡浅薄で我々には堪えられなかつた事も少くはありませんでした。ストラウスの楽劇ザロメが演奏間際になつて米国風の輿論のために禁止となつた事などは其一例でせう。小泉八雲（ラフカディオ・ハーン）が黒人の女を愛した様な事から世に容れられなくなつた事なども所謂米国風輿論の犠牲と見るべきものでせう。露西亞のゴルキイが本国を亡命して紐育に行つた事があるが矢張輿論のために長く其地に止る事が出来ずにしまつた様な事がありました。然し目下日本の情勢ではアメリカ人の欠点を指摘する事は出来ませんから其のよい方面を思出して御話をしませう。

事例③

日米生活の相違は印鑑の用不用の相違で萬事が想像されます。今は米国の風習をほめて置きさへすればよい時代になつたのですからこんな事を云ひ始めたら限りがありますまい。紐育は岩の上に建てられた町ですが、東京の市街の半分は泥海が土地になつた所に建てられて居るのです。ここにも何かの相違があります。

「亜米利加の思出」は全5頁の小品であるため②のウエイトの高さが際立つ。また小説ではなく、随筆であるため、削除部分を書替えないで、ゲラ原稿を上下くつつけることは論旨を不明確にして、読者の理解を困難にしたが、荷風はあえて出版を強行した。黒人差別やロシア人排除といったアメリカ民主主義批判が検閲にひっかかった原因であらう。③の箇所の削除指定は、生活の隅々にまで顕著なアメリカ追随の日本人の姿勢を批判したためであらう。

また「冬日の窓」という別の小品でも書き直しがなされなかった(④)。これはアメリカ文化礼賛という風潮への批判で②、③と共通する。

事例④

北米人の勝利は如何なる感化を形に於て、精神に於て日本文化の上に残すであらう。わたしは希望する一食前の祈祷と、街頭に於ける夫婦の接吻と、ジャズが持つてゐる世界風靡の魔力ばかりに限られない事を

「フラタニゼーション」fraternization 箇所への検閲強化ー『問はずがたり』

「問はずがたり」は雑誌『展望』(筑摩書房)の1946年7月号(7月1日発行)に掲載され、同名タイトルで扶桑書房から同年7月31日に出版となった。1か月内での雑誌掲載分のスピード刊行であったが、この間に荷風は検閲に対し異常な対応を示している。事例⑤の後半の削除部分が雑誌ゲラで削除を指示されたところである。荷風はいつものように書き直しをしないで、雑誌に指定箇所を削除して掲載した。ところが単行本にする段階では雑誌で削除された箇所を復活して何食わぬ顔で検閲当局へゲラを提出した。するとその箇所だけでなく、前半の他の場所でも赤字が入った。つまり削除部分が拡大し、合計8行となった。検閲者による荷風の検閲無視への懲罰である。

事例⑤

「さうですか。」

「もう日本人なんぞにはつき合ひたくないと仰有るものですから、つい、その・・・私も遠慮して居りました。いや、はや。」

さびし気な口元の微笑と滞りがちな語調とで僕は春山と雪江との間には多少の波瀾があつたものと推察し、

「さうですか。あの児は世間で云ふ型にはまつた無軌道女の方ですからな。仕様がなです。」

「全くです。さう云つては悪いですが全く無軌道です」

春山はせめての心やりは、それとなく当てこすりを言ふつもりらしく、丸の内へ通勤する女事務員の中には進駐軍の兵卒と日比谷公園で出会ふもの少くない。銀座に再興したカフェーの女給やダンサーは日本人の客には見向きもしないやうになつた事を語り、
「然し無理ありません。米兵のお相手になつてゐれば、お金ばかりぢやありません。煙草でもチョコレートでも欲しいものは不自由しませんから・・・」

Above DELETED:fraternization

検閲者が変わると削除しない可能性があるると荷風は判断したのだろうか。雑誌掲載の際の検閲者は日本人と思われる J.Hara と Takagi であつたが、単行本ではアメリカ人らしい

Towazo Gaitar となっている。アメリカ兵と日本女性の付き合いを示す風俗現象、それは当時の CCD の検閲用語では Fraternization (フラタニゼーション、交歓) と呼ばれ、検閲者から厳しい視線が注がれる対象となっていた。それを見逃すと検閲者が上級の監督官にとがめられるようになっていた。ところが『問はずがたり』が雑誌から単行本になるわずか1か月間に、ことフラタニゼーション記述に関しては、当局上部の検閲削除姿勢が急に強まり、現場の検閲者に周知徹底されるようになった。そういえば事例②にあった「小泉八雲(ラフカディオ・ハーン)が黒人の女を愛した様な事から世に容れられなくなった事」という箇所はアメリカ人八雲と黒人女性のフラタニゼーション記述であるが、黒人の日本人女性との接触を連想させるものとして前後の文章の削除をまねいたと言えなくもない。

なお雑誌『展望』では Possible Violation(違反の可能性のある箇所)とゲラにメモを入れられながら、パスされていた以下の箇所が単行本では削除になった。

事例⑥

兎に角に、二十世紀も半に到着した此の現代ほど呪ふべく、憎むべく、恐るべき時代はあるまい。

平和の基礎は果して確立したのだらうか。ナチと其連盟国の屈服によつて僅になされた今日の平和は一時の小康に過ぎないのではなからうか。モネーの絵画、ロダンの彫刻、ドビュッシーの音楽が文化の最頂点を示したやうな、さういふ目覚ましい時代は、いつになったら還つて来るのだらう。人の世の破滅は正にこれから始まらうとしてゐるのではなからうか。果敢い淋しい心持は平和の声をきいてから、却て深く僕の身を絶望の淵に沈めて行くやうに思はれる・・・

事例⑥は②～④と共通していて、日本人とかアメリカ人とかの国籍の差や社会観など違いに触れて占領軍を間接的に批判、揶揄したもので、フラタニゼーションに該当しない。たまたま記事に当たった検閲者によって、問題箇所がパスされたり、削除となったりした。

書替えと削除の徹底—『罹災日録』の刊行

『罹災日録』(扶桑書房)は1945年の1年間の日記抄である。『新生』の1946年3月～6月に掲載終了の約半年後の1947年1月に単行本となった。『問はずがたり』のようなスピード単行本化ではなかった。『罹災日録』は雑誌段階では一切検閲指示を受けていないが、厳しい検閲体験をしていたので、『罹災日録』の単行本化では慎重な検閲対応を行ったのであろう。荷風は検閲当局の姿勢の強化を検閲ゲラへの接触からじっくり学ぶことになった。またゲラを運んでくる編集者から検閲情報を入手していただろう。そして単行本化を遅らせてでも、書き替えや消去(自主検閲)を行ったことが判明する。

筆者が確認したところ、プランゲ文庫所蔵の単行本ゲラは3か所の削除が指示されている。以下の赤字部分が雑誌『新生』1946年6月号に出ていて、単行本から消えた箇所を示す。

事例⑦

九月十日 くもりて蒸暑し。隣家の人昨日東京まで用事あり。最終の列車にて熱海に帰らむとする途中、藤沢の駅にて米軍の一隊四五十人ばかり乗車せむとするに会ふ。客車雑沓して乗るべからず。(中略) 乗客はその列車既に最終のものなれば已むことを得ず一夜を駅の構内に明し今朝未明の汽車を待つて纔に帰るを得たと言へり。是亦曾て満州に於て当に日本人の其国人に対して為せし所。因果応報と云ふべき歟。此日岡山より転送の郵書数通を得たり。

アメリカ軍の横暴な日本人乗客無視を描いた箇所がプレスコード違反と検閲当局に見なされたことが分かる。

事例⑧

九月十六日 日曜日。半陰半晴。台所にて人の語るをきくに、近日配給米一人一日分二合七八勺なれば、大豆また玉蜀黍を混ざるも朝夕三度の食となるに足らず、されど此れをさへ口にする事を得るものは猶幸なり。農家へ買出しに行きても麦芋の如き主食物を得ること容易にあらず。国民飢餓の日刻々に迫り来れりと云や余はいはれなく余命果たしてよく来春まで保つことを得るや否やを疑へる時なり。戦敗後の世情、一つとして傷心の種ならぬは無し。昨日まで撃ちてしやまむと軍国主義に謳歌せし国民忽豹変して自由民権を説く。義士に非らざるも誰か眉を顰めざらんや。

⑧の赤字部分は単行本では「中略」となっている。

事例⑨

九月二十六日 米国の学者好事家若し根本的に現在の日本を知らむと欲すればまづ其研究を一般より始めざるべからず。提督馬公閣下。以て奈何となすや。

⑧の記述は日本人の軍国主義から自由主義への豹変ぶりを屈辱的と慨嘆した。すると記述の背後にある軍国主義への賛美を嗅ぎ取った検閲者は削除指定を行う。また⑨のマッカーサーの日本への介入の指摘が検閲方針に抵触すると見なされた。ただし⑧、⑨はフラタニゼーションに関連しない検閲である。もはや荷風は検閲にひっかからぬフラタニゼー

ション記述をするようになっていた。

筆禍回避の用心深い筆致－1946年後半以降

事例⑩

1946年7月14日 午前小川近藤二氏来話、午後小川氏の家にて田毎美津江に逢ふ、もとオペラ館に在りし踊子達の近況を知る、米兵の妾になれるものも少からず又新小岩のアパートに住める一人は黒奴の子を生落したりと云（2）

事例⑪

1946年9月19日 東京某生の来書に、芝口もと太田屋牛肉店前の道路に朝九時頃洋装の若き女黒奴の児を分娩し苦しきみあるを、みる人大勢いづれもごまを見ろと云ふ面持にて、笑ひ罵るのみ、誰一人医者を呼びに行く様子もなかりしと云、戦後人情の酷薄なること推して知るべし、云々（3）

1946年以降の日記は占領下では公刊されなかった。事例⑩、⑪は占領期に書かれて、日本独立後の1953年以降に出版されたものである。

占領期の女性描写には黒人兵が付きものであった。それが売り物となるはずであった。荷風の売り物は花柳界、遊郭、巷の風俗描写の綾にあった。彼のたくみなモチーフ、構成、老練な記述に幅広い読者の支持があった。フラタニゼーションは戦前の日本にはなかった日本女性とアメリカ兵士との風俗現象である。本来なら彼の戦後の日記や作品の中核となるべきものであった。とくに日本女性に軽視されだした男性読者は荷風の手によるパンパン蔑視の描写に興味をいだき、パンパンの不幸の記述に溜飲を下げた。

ないまぜとなった性への好奇心とナショナリズムが老体の中で煮えたぎって、荷風の創作活動を高揚させた。荷風は「敗戦後の世相を背景に銀座のパンパンガールを主人公とした小説をつくるべく、その調査をしていた」（4）という。その下書きが日記であった。当代一流の戯作者の筆致は冴えわり、『墨東綺譚』に相当する名作が誕生したかもしれない。

実際アメリカ兵や日本女性の行状への露骨な描写は日記には頻出したが、それは1946年10月以降ふつりと無くなる。1947年3月19日に「過日大森辺にて黒奴と日本の女との情死ありしがこれも新聞紙上に掲載することを禁ぜられたりと云」（5）といった記載は自身への戒めのメモと見ることもできる。アメリカ機関の家宅捜査を警戒し、あるいは検閲当局の責任追及を恐れて、自身の探索、観察を他人の「来話」、「来書」、「云々」といった責任逃れの字句を冒頭や末尾に載せる用心も働いていた。抽象的な記述が多くなる。

その自主規制は自己の文学者としての真価を抹殺しかねないものだったので、「扶桑書房

主人校正擦を持来る」(6) といった場での単行本の検閲削除の接触は荷風の身をきるつらさであったに相違ない。ところがそのゲラに検閲当局の削除指示が入っていることはたしかであるが、日記のどこにも検閲のことに触れていない。その存在はこころをいらだたせるので、荷風はあえて記述しなかったのかもしれない。それとも公刊を予定した日記であったため、検閲の存在を削除することによって、筆禍を避ける周到さとか、用心深さがあったのかもしれない。荷風はその描写に代るアメリカ批判を展開しようとするが、列車でのアメリカ軍の横暴さの描写でさえも単行本では削除を命じられた。近い将来への公刊を予定して書き綴る日記であったため、1947年以降は日記中にもフラタニゼーションの記述はほぼ消えた。

1948年の時点で出版界での関連事項の文字や写真の表出は困難になった。実際、検閲統計ではフラタニゼーション違反は1947年9月以降ゼロとなった。(7)

荷風を従順にさせたものⅠー生活不安

冒頭に引用した4つの事例を見ると、荷風が戦前に行っていた戯作者風の権力批判でなく、正面から新しい権力に挑戦しているように受け取られかねない。

親友の谷崎潤一郎は名作『つゆのあとさき』の1931年の書評で「氏はわれわれと同じく現代の作家の一人であるけれども、われわれのように原稿料に衣食する人ではない。又今更文壇的功名心や野心に駆られる筈もない」(8)と語っている。たしかに荷風は莫大な遺産を父親から相続していたため、戦前には売れ行きを気にしないで、金利や配当で優雅な生活を送ることができた。だが終戦後の経済の混乱で、相続資産価値は暴落し、谷崎のように原稿料に依拠した晩年を送らざるをえなくなった。戦前は泰然としていた原稿料の多寡を詮索しない姿勢を転換し、原稿支払いに忠実な版元を選び、原稿料確保のために筆禍の回避に注意するようになった。まもなく襲って来たインフレの嵐の中で、荷風は自主検閲に励み、検閲の文法を1947年にはマスターするほどとなった。

荷風を従順にさせたものⅡーフラタニゼーション検閲

GHQは戦前の検閲当局よりもスキがなく、したたかであった。1947年10月15日以降、出版は一部を除いて事後検閲となったし、1949年11月に検閲廃止となったが、占領初期の書替え無視の姿勢に戻ることはなかった。

とくにフラタニゼーション検閲の厳しさ、執拗さが彼の戯作者的権力批判の姿勢を萎えさせた。1931年10月の『中央公論』での「つゆのあとさき」に見られたしたたかな検閲当局への対応(9)の経験はGHQには生かせられなかった。

1946年以降の日記は占領下では公刊されなかった。事例⑩、⑪は占領期に書かれて、独立後の1953年以降に原本から直接単行本化された箇所である。

荷風の実体験に基く私娼の世界の女性心理、行動への鋭い観察と老獪な記述は読者の幅広い支持を集めた。フラタニゼーションは戦前の日本にはなかった日本女性の異国の占領

軍兵士との「交歓」である。菊池寛は1946年8月の雑誌『リベラル』に書いた「貞操に就いて」というエッセーで、「もう一つは、日本娘の進駐軍相手の情事問題」は「止むを得ない現象」と肯定的に書いたものの、検閲で削除となった(10)。佐多稲子は1947年9月刊の『樹々のさやぎ』(プランゲ文庫)でアメリカ機関での女性の職場描写でのアメリカ煙草ブランドの記述が検閲削除となり、書き換えに応じた(11)。

荷風は先の「問はずがたり」で女事務員の隠れたフラタニゼーション記述で筆禍を受けた。菊池寛と同時期である。しかし荷風が好奇心を寄せるのはいわば公然と街頭で売春を行う素人女性の行動である。彼は貧しい日本人の男に目を向けなくなった一般女性あがりのパンパンとアメリカ兵士との新奇な風俗現象に職業的な視線を集中させた。とくに黒人兵との「交歓」が目ざわりであった。荷風は事例⑩、⑪にあるように、黒人兵を「黒奴」と蔑視した。白人兵は許すにしても黒人兵までがヤマトナデシコの性を買いかさっていることに心底腹立たしかった。当時、黒人を相手にするパンパンは“黒パン”と呼ばれて、白人相手の“白パン”よりも日本人から冷罵されていた。“混血児”とは黒人のハーフを意味し、条件反動的に唾棄すべきシンボルになった。当局だけでなくメディアの世界からフラタニゼーション記述は一層タブーとなって行った。

荷風の作家生命を絶ったもの一『問はずがたり』の8行削除指示

④は主人公と養女雪江との大空襲の夜での情交を描いた『問はずがたり』の仕上げの箇所である。谷崎潤一郎は先の『つゆのあとさき』書評で「最も肉欲的な淫蕩な物語を、最も脱超俗世間的な態度で書いている」と述べた。エロには戦前の日本当局よりも寛大だったGHQもナショナリズムとエロが底流に絡み合う *fraternization* は検閲で排除すべき対象となった。戯作者的手法で当局を煙にまいた荷風の恰好かつ独壇場的テーマであるはずであった。『問はずがたり』のこの8行に凝縮された部分の削除は本作品の文学作品の精華を読者から奪う。一方、同作品の生命線を鋭く衝いた検閲者の力量を示している。雑誌、書籍に少なくとも3人の優秀な検閲者を配したGHQは荷風の全著述行動を監視するようになっていた。8行を消されたこの作品は抜け殻となり、駄作となった。そして長年の作家意欲や自信を萎えさせる契機となった。

戦後の荷風の評価は一般に低い、どの評論家も文学史家もこの8行削除の意味を理解していない。

検閲指示箇所の書き換えなし—荷風の譲れぬ矜持

それにせよGHQによる削除命令箇所を一切の「書き換え」拒否で対抗した荷風は、占領期の文学史や言論史に名誉ある地位を残した。彼の深層には占領下の権力に抵抗する日本人のナショナリズムがあった。

注

(1) プランゲ文庫所蔵の作品『薄明』(新紀元社、1946年、145頁)の事前検閲ゲラでは、「軍事教練の査問のときに、校長先生に敬礼！といふ号令がかかつて、私たちは捧げ銃をして、みると」という箇所が削除を命じられた。そのとき、太宰は「「或る時、生徒一同が整列して、校長を迎へたことがあつたが、その時」校長は」と自らゲラに書き直しを行っている。また太宰は『トカトントン』でも書き直しをおこなった(滝口明祥「「トカトントン」の検閲」(『占領期雑誌資料大系』文学編Ⅱ岩波書店、2010年、144ページ)と 滝口明祥『太宰治全集』の成立一検閲と本文『Intelligence』第8号、2007年参照を参照)。

(2) 『荷風全集』第25巻、455頁。

(3) 『荷風全集』第25巻、452頁。

(4) 秋庭太郎『考証永井荷風』岩波書店、1966年、681頁。

(5) 『荷風全集』第25巻、485頁。

(6) 『荷風全集』第25巻、463頁

(7) 山本武利『占領期メディア分析』法政大学出版局、1996年巻末所収の付録5「カテゴリ別検閲処分件数の推移」参照。

(8) 谷崎潤一郎「つゆのあとさき」を読む』『永井荷風集』(二)現代日本文学大系24筑摩書房、1971年所収

(9) 中島国彦「永井荷風「つゆのあとさき」の本文と校閲」『検閲・メディア・文学』新曜社、2012年参照

(10) 山本武利編者代表『占領期雑誌資料大系』文学編第Ⅱ、2010年、209-210頁

(11) 佐多稲子『樹々のさやぎ』小沢出版社、1947年、6-7頁

●本稿は山本武利『GHQの検閲・諜報・宣伝工作』岩波書店、2013年所収の「『永井荷風とフラタニゼーション』」177-193頁を増補したものである。

●下線部分は検閲削除箇所を示す。